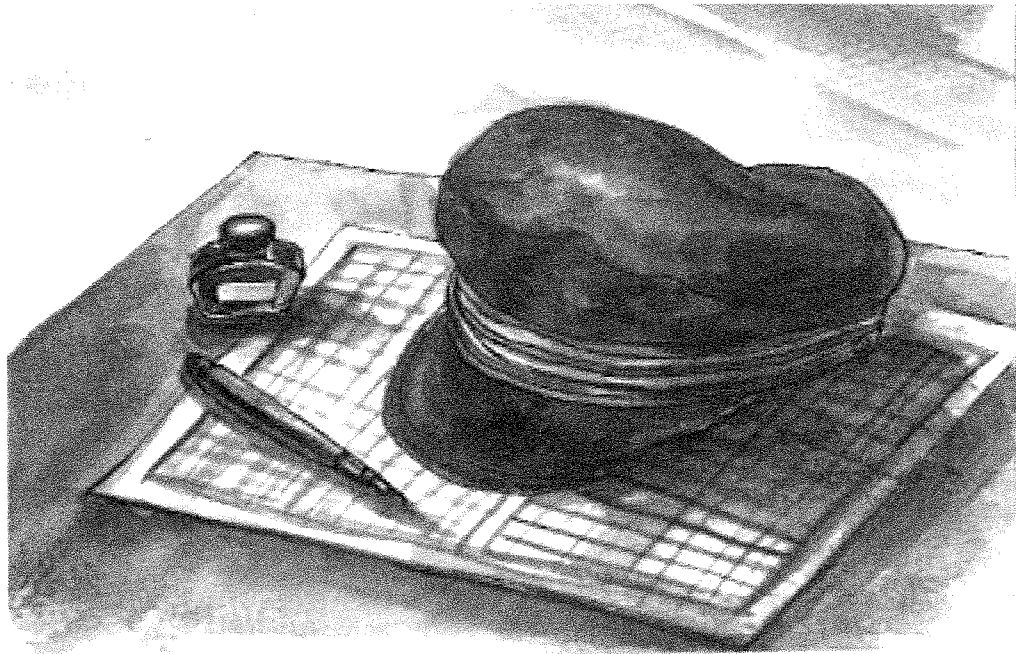


2015年6月7日

戦後70年

いま、伝えたいこと

13歳の学徒動員



文 岡本 榮一

イラスト kameko (川本智子)

はじめに

「災害は忘れたころにやってくる」と言われていますが、^{つねひごろ}常日頃から『**自分の命は、自分で守る**』^{こころがま}心構えだけは、持っていてほしいと思っています。

今年は、戦後70年目を迎えますが、戦争の^{おそ}恐ろしさ、つらさ、苦しさを忘れた人が多くなりました。というより、戦争を知らない人たちが多くなったのです。

そこで、まだ^{きおく}記憶が^{たし}確かなうちに、自分がみなさんと同じ年頃に体験したことを、記録に残して伝えようと思いました。

災害も戦争も忘れないことが、命を守ることにつながるのです。

戦争で幸せになる人は誰もいないことを知り、『**平和のために自分は何ができるか**』を考えるきっかけにしていただけたら、幸いです。

1. 幼き日のこと

私は『満州事変』が起こった翌年に生まれ、5歳の頃には『日中戦争』が始まりました。それが終わらないうちに、ヨーロッパでは**第二次世界大戦**が始まり、日本も**太平洋戦争**として参戦しましたので、生まれてから14年間、ずっと戦争の中で育ちました。

私の家族は、祖父と両親、兄弟姉妹が7人の、計10人の大家族でした。子どもがたくさんいる家庭の子は「^い要らん子」(大きくなると軍隊行き)と言われていたのは、子ども心に悲しいものでした。

国民学校(小学校)3年生の時、一番上の兄が^{しゅつせい}出征(戦争に^{きょうせいてき}強制的に参加させられる)し、1945年6月比島(フィリピン)ルソン島中部で^{せんし}戦死しました。

当時、国民学校の校庭は、運動スペースを残してサツマイモ畑に変わっており、高学年になると、^{しよくりょうぞうさん}食糧増産のため家からクワを^{かつ}担いで登校し、農作業(主にサツマイモ作り)の^{きんろうほうし}勤労奉仕(ボランティア)にかり出されました。中学生以上は戦争による人手不足を^{おぎな}補うために、^{ぐんじゅさんぎょう}軍需産業や食糧生産のため、強制的に働かされて(学徒動員)、勉強をしたくてもできませんでした。

運動場(校庭)は、^{てつきらいしゅう}敵機来襲になると隠れることができないので、ほとんど講堂で運動

をしていました。

その頃は、自由という言葉はあっても無いに等しいくらい、勉強よりも戦争に勝つことが大事との思いにさせられていましたし、「欲しがりません 勝つまでは」を合言葉に、戦争に必ず勝つと信じてやっていました。

2. 中学生のころ

1945年（昭和20年）3月に島根県の宍道国民学校（現在は小学校）を卒業し、4月に島根県立松江工業学校に進学。（戦時中のため、普通校より技術^{ぎじゆつ}を身に着ける実業校^{じつぎやう}入りをすすめられる）学校へは汽車(SL)で通います。

玉造駅（現在の玉造温泉駅）を通過^{つうか}するさいには、宍道湖^{こがん}の湖岸にある海軍水上航空基地を見ないように、木製のよろい戸（日差しを遮りながら通風^{つうふう}が可能な、幅^{はば}のせまい羽根板が斜めに取り付けられた戸）を下すように命ぜられました。よろい戸の窓をそっと持ち上げてのぞき見をしたり、新聞に掲載^{けいさい}された戦争の様子を話したりすると私服^{けいんぺい}の憲兵（日本軍の警察官^{けいさつかん}）から注意されました。

学校は、6年生を卒業して入学した者ばかりではなく、地元の国民学校高等科（現在の中学1、2年生）から入った者もあり、同級生でも1～2歳の年齢差がありました。

戦時中のため、学力は優秀^{ゆうしゅう}でも、家計^{かけい}が苦しく上級の学校に行けない人も多くいました。中学に入った年には、第二次世界大戦（太平洋戦争）が始まっていたので、勉強はそっこのけで、出雲大社近くの大社湾を見下ろす出雲市古志町新宮山^{しんぐう}（標高256m）山頂^{しんち}の陣地づくりに学徒動員されました。

その頃、ソ連（現在のロシア）が大社湾の「稲佐の浜」に上陸するという噂話^{うわさ}を聞いていました。

《沖縄では、その年（1945年）の4月1日に、アメリカ、イギリス、オーストラリアなどの連合軍が上陸し、6月22日に日本兵の抵抗はなくなりました。地下壕の中で約4000人の兵士が自決したと言われています》

3. 学徒動員

私たちは6月ごろ動員され、家を離れ、松江市から約40km西にある出雲市駅から南へ歩いて20分ほどの、^{えんや}塩冶小学校の講堂に^{ねとま}寝泊りしました。

そこには地元の工業学校、普通学校、農林学校の1年生（現在の中学1年生）約200人が、2週間交代で集められていました。

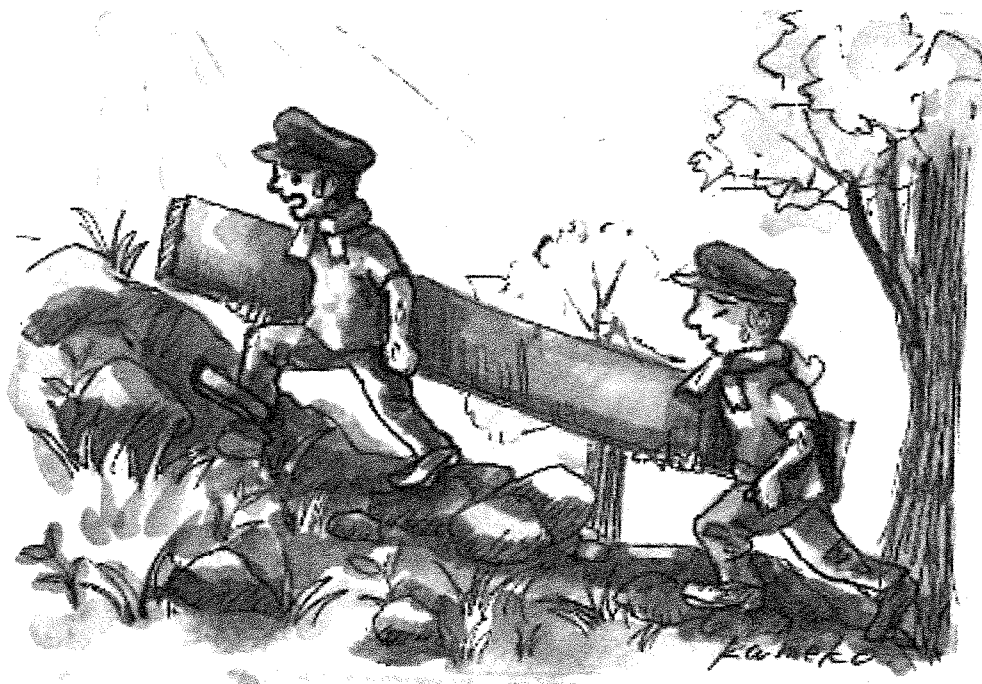
毎日、6時30分に起床してラジオ体操をし、交代でご飯炊き（炊事）、掃除を担当しました。慣れないので、焦げご飯もできましたが、腹の足しに（お腹がすいているときの補助食として）はとても役立ちました。

地元の婦人会のおばちゃんたちから^{にぎ}握り飯をもらい、徒歩約30分（1.5km先）の古志小学校（今は^{はいこう}廃校）へ二列行進で行きます。

^{こうてい}校庭には、^{じんち}陣地を作るために^{せいざい}製材した^{やいた}矢板（生木の松板・厚さ3cm、幅30～35cm、長さ180cm）が積み上げられていて、地元のおじさんから二人一組に1枚ずつ渡されます。

※ 矢板とは、陣地づくりの時、掘った後、土壁が崩れないように抑えるための土留め板

全生徒に行き渡るのが9時ごろで、行き先は、古志小学校から^{ちやくせんきより}直線距離でおよそ6km先の、日本海が見える新宮山の山頂まで2km程度のジグザグの山道をヨイショ、ヨイショ



と抱^{かか}えて登るが、抱え手が下手になると重みが増してとても辛^{つら}かったことをおぼえています。

(注) 広島市武田山(410m)の途中にある「みどり会のふれあい広場」より高い位置

200人近い学徒が2人1組で矢板を素^す手(手ぶくろなどは無い)で抱えて歩く様は、まるで蟻^{あり}の行列のようでした。

1日1往復の行程でしたが、舗^ほ装^{そう}をしていない道路は石ころがゴロゴロしていて歩きにくいものでした。水筒^{すいとう}の水がなくなると、道ばたの農家^{のうか}に水をもらい^{のうか}にかけ寄り、井戸からくみ上げ、お互いに分け合いました。農家のかたはとても親切にしてくださいました。

途中、200mばかり登ると休憩^{きゅうけい}をします。何回目かの休憩に昼飯(にぎりめし)を食べますが、そのおいしかったことは、忘れられない思い出の一つです。

体力に差がある13歳の私たちは、追^こい越したり、追^こい越されたり^の繰^くり返しで、14時ごろ山の上に着きます。動員されて陣地を作っている大人に矢板を引き渡し、ガタガタ道を主に軍歌や童謡などを歌いながら16時ごろ宿泊地の塩冶小学校へ帰り、それから下着などの洗濯をします。

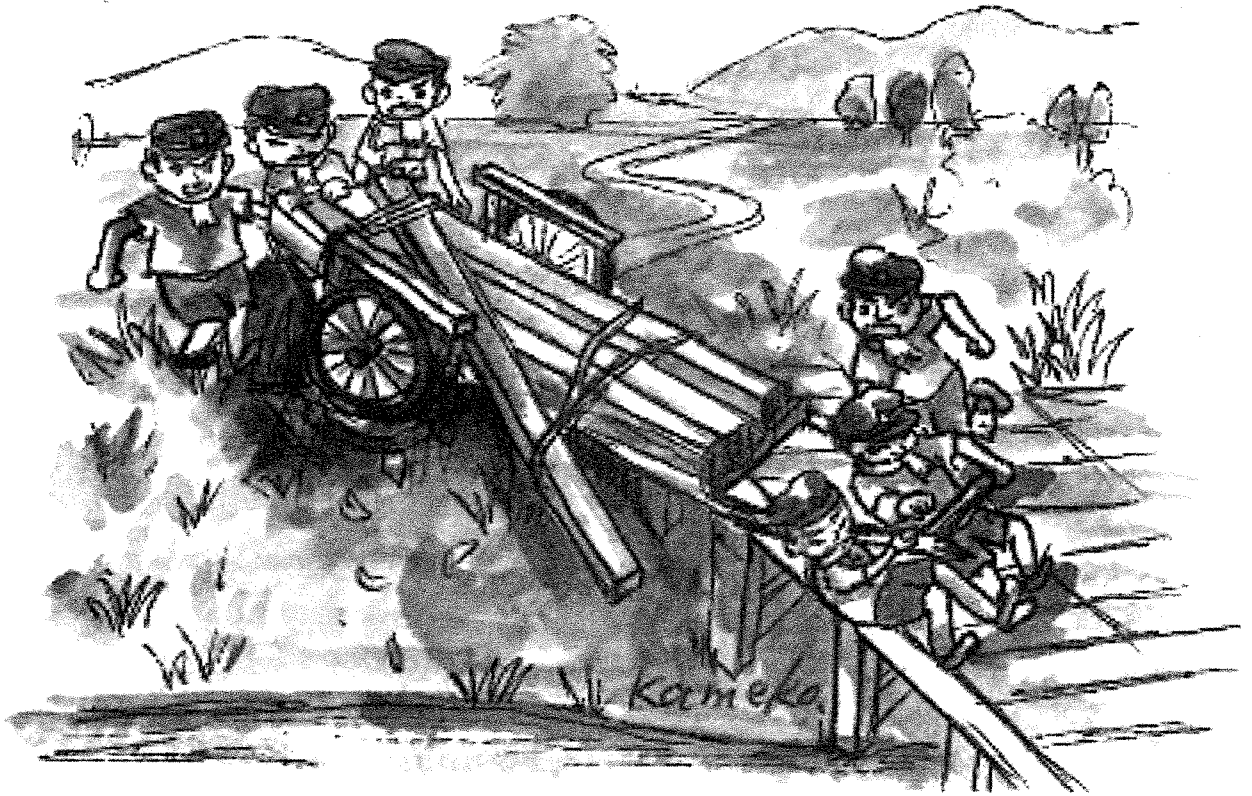
ある日、矢板を下ろした山上付近で、陣地作りに動員された大人の中に、実家の隣のおじさんを見つけ、二人ともびっくりしました。つかの間の出会いでしたが、今でもそのこ^のとが脳裏^{のうり}に浮かんできます。

とても重くきつい矢板の運搬^{うんぱん}でしたが、落伍者^{らくご}はいませんでした。だれ一人辛^{つら}いとか、疲^{つか}れたとかという者はいなかったし、我慢^{がまん}強^{つよ}かったと思っています。それは目の前にある「戦争に勝つ」という使命^{しめい}感が、そのようにさせていたのかも知れません。

5. 動員初日の出来ごと

クラスで背の高い10人ばかりが選ばれ、その人たちはオンボロ大八車^{だいはちぐるま}(荷物運搬^{うんぱん}用の大きな二輪車)を渡されました。それに10枚ほどの矢板を積んで、前を3人で引っぱり、後ろを3人ほどが交代で押して運搬中、重みで橋げたが崩^{くず}れ3mほど下の川に、大八車もろとも転落してしまっただけです。1人が大八車の下敷きになりましたが、幸いにも川の水が少なく、命は助かりましたが、胸を強打^{いしき}し意識^{うす}が薄^{うす}れ、近くの家の戸板(雨戸の板。当

時の家はガラス戸ではなく、ほとんどが板でつくった戸であった。これをはずして人や物を



を運んだりするときに使った) をはずしてタンカのかわりにして、地元の医院に運ばれました。しかし当時は薬が無いので、^{じょうりゅうすい}蒸留水を注射されたあと、すぐにそこから、同級生二人が付き添い、(車は走っていないし、もちろん救急車は^{きゅうきゅう}ありません) 松江市で一番大きい日赤病院に徒歩と汽車で行きました。みんなで心配していましたが、診断は「骨盤骨折」。2～3日は危険な状態が続く恐れがあったのに、付き添いの二人に支えられ、安来市の実家へ汽車と徒歩で帰らされました。

現在の^{いりょう}医療では考えられない^{そち}措置でした。後日、学徒動員慰労金として5円(現在のレートで換算9,500円)が届きました。(2015.05.03 電話で本人に確認)

6. ^{しょくりょうじじょう}食糧事情

その頃の食糧事情は、米が少ないので食べる量を多くするため、大豆を混ぜたり、サツマイモを入れたり、またカボチャを入れ量を増やしたご飯に、味噌汁と漬物^{つけもの}だけのものだったので、動員されている途中で^{えいようしつちょう}栄養失調になるものがでました。私もその内の一人で2回目の7月動員の時は自宅で静養させられました。現在の病名では「^{かっけ}脚気」でした。

自宅で静養中、白いご飯に当時では珍しい卵焼き(母親の甘辛い味は今もわが家の定番)などを食べたとき、家庭のぬくもりを強く感じました。反面、クラスの間は動員で苦しい、辛い日々を送っていると思うと、家にいるのが悪いような、恥ずかしい気持ちでした。

その頃、卵はニワトリを飼っている近所からもらう(物々交換)しかなく、とても貴重な^{ちよう えいようげん}な栄養源でした。

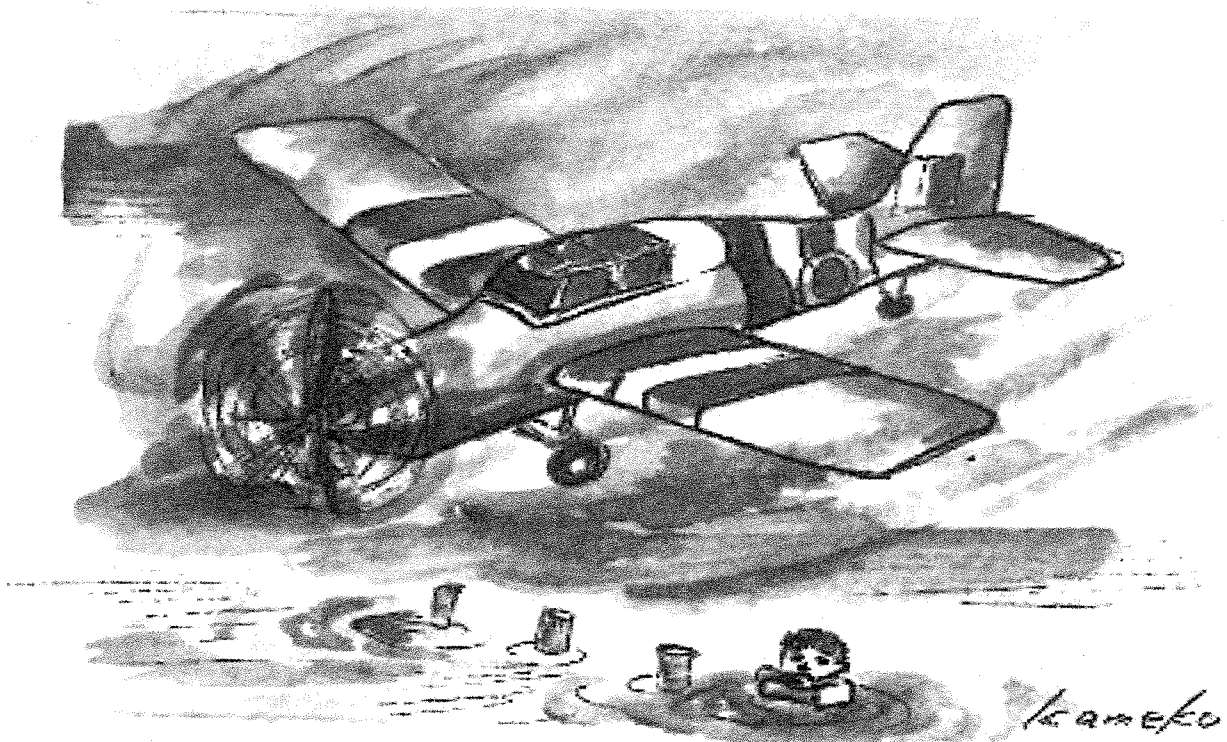
栄養失調だからといっても、自宅で寝てばかりではられません。母親に連れられて畑の野菜作りや草抜き、田んぼの手伝いなどをしました。

敵機来襲^{てつきらいしゅう}のサイレンが鳴ると近くの木の陰^{かげ}などに隠れるので、満足に手伝うことはできませんでした。

7. 敵機来襲^{てつきらいしゅう}

終戦の20日前の7月28日(土)の午前、体力をつけるため、空襲警報はだされていましたが、いつもと同じ高度7~8000mぐらいで飛来する偵察機だろうと思って、一人で深さ3~4mの^{しんじ}いどの宍道湖で実家の船をつなぎとめる3~40m先の杭^{くい}に向かって泳ごうとしていたら、突然西のほうから飛行機の爆音とともに「バリバリッ」「バリバリッ」と銃撃音が聞こえてきました。

とっさに空襲^{くうしゅう}とわかりましたので、近くの杭^{くい}にすがりつきました。と同時に、超低空の



艦載機（航空母艦に積まれている戦闘機）グラマン戦闘機（アメリカ）数機があつという間に真上を通り過ぎました。とても大きい飛行機に見え、しばらく恐ろしさでボーッとしていたことを覚えています。

出雲市直江町の大社航空基地を銃撃したものと感じました。

数日たって新聞は、『28日、四国沖の航空母艦から飛び立ったおよそ250機の米軍機は北上し、大社航空基地を空襲後、玉造駅と乃木駅の間地を通過中の列車を銃撃、乗客14人が死亡、10数人の負傷者がでた。』また、『同時刻に近くの海軍水上航空基地（玉湯町）をも空襲、基地本部の講堂にロケット弾が撃ち込まれ、食事をしていた隊員24人死亡』と報じていました。さらに同級生の動員先だった松江市内の木材集積所を銃撃し、同級生は、命からがら木材の陰に隠れて無事でした。

この空襲は、島根県東部地方においては、最初で最後の敵機来襲でした。

動員から帰っても、勉強どころか木材の運搬やら、何故か製氷所から氷を積んで運ぶなどの運搬作業ばかりが待っていました。

13歳の子どもにできることは何でもやらせる…という感じでした。

当時、米が不足して配給制度（1942年4月から家族の人数に応じて米の配給を受けるために発行された米穀配給通帳がないと米が買えなかった。1981年に廃止）になっていたので、松江市内から登校する生徒の中には弁当を作ってもらえず、手ぶらで来るものもいました。（その人たちには、みんなで分け合って食べました）

私は、幸いにして半農（家業の海運業の半分が農業）の家庭であったので、家にいればお米と野菜はあり、片手間（本業の合間にほかの仕事をする）で漁業をしていたので、エビ、アマサギ（ワカサギ）、カニ、ウナギなど、ほかの人に比べて食べることには恵まれていました。

8. 戦争の終わり

8月に入り、広島に特殊爆弾が投下され、焼け野原になったということを新聞で知りました。今後20～30年は草木も生えないだろうと言われ、どんなにひどい爆弾が落とされ

たのだろうか心配でした。(それは、のちに原子爆弾だとわかりました。)

8月の15日に戦争は終わり、勝つ予定だったアメリカ、イギリスに負けて、日本が降伏したということが町中に知れ渡りました。この頃、大人も子どももこれからはどうなるのか、まったく先行きが見えない不安な日々を過ごしました。

二学期(9月)が始まると、学校は、^{よかれん}予科練(海軍飛行予科練習生…大戦末期は^{とっこうたいいん}特攻隊員)帰りの^{ねんちょうしや}年長者がクラスに^{へんにゅう}編入されるようになりました。物不足と重なり、学生服はバラバラで、陸軍の軍服や予科練服(紺地に七つボタン)をリフォームして登校する生徒もいました。

また、実家近くの穴道湖の湖岸には、日本軍が使用していた照明弾と思われるものがたくさん捨てられていたので、マッチで点火してみるとたちまち火を噴き、真昼なのにさらに明るい火をふいたのを覚えています。

日本が負け、アメリカ・イギリス軍の進駐が始まると、わが^{いなが}田舎町にもジープに乗ったアメリカ兵、イギリス兵(オーストラリア兵かも)が^{あらわ}現れるようになりました。

確か1946年(昭和21年)の夏と思いますが、実家の小舟で遊んでいたら、^{けんじゅう}拳銃と



ライフル銃を持ったアメリカ軍とイギリス軍の兵士がやってきて、「舟に乗せてくれ」と言

うので、一緒に乗っていた子どもは降ろされ、^{おそる}恐る恐る乗せました。『もしかしたら殺されるのではないかと、岸では家族が心配そうに見ているだけの中、びくびくしながら舟を漕ぎ出しました。

しばらく^{かち}鴨などの^{えもの}獲物を探して漕ぎましたが、見つからないままでした。帰りぎわにミカンのような丸い果物をくれたので、母親と分けて食べるととても^{おい}美味しかったことを覚えています。何年か過ぎてそれは「オレンジ」だとわかりました。

以上が、**私の戦中・戦後の体験**です。が、その頃の学生生活を振り返ってみますと

- ① ^{れいぎさほう}礼儀作法と^{きび}規律は厳しかった。

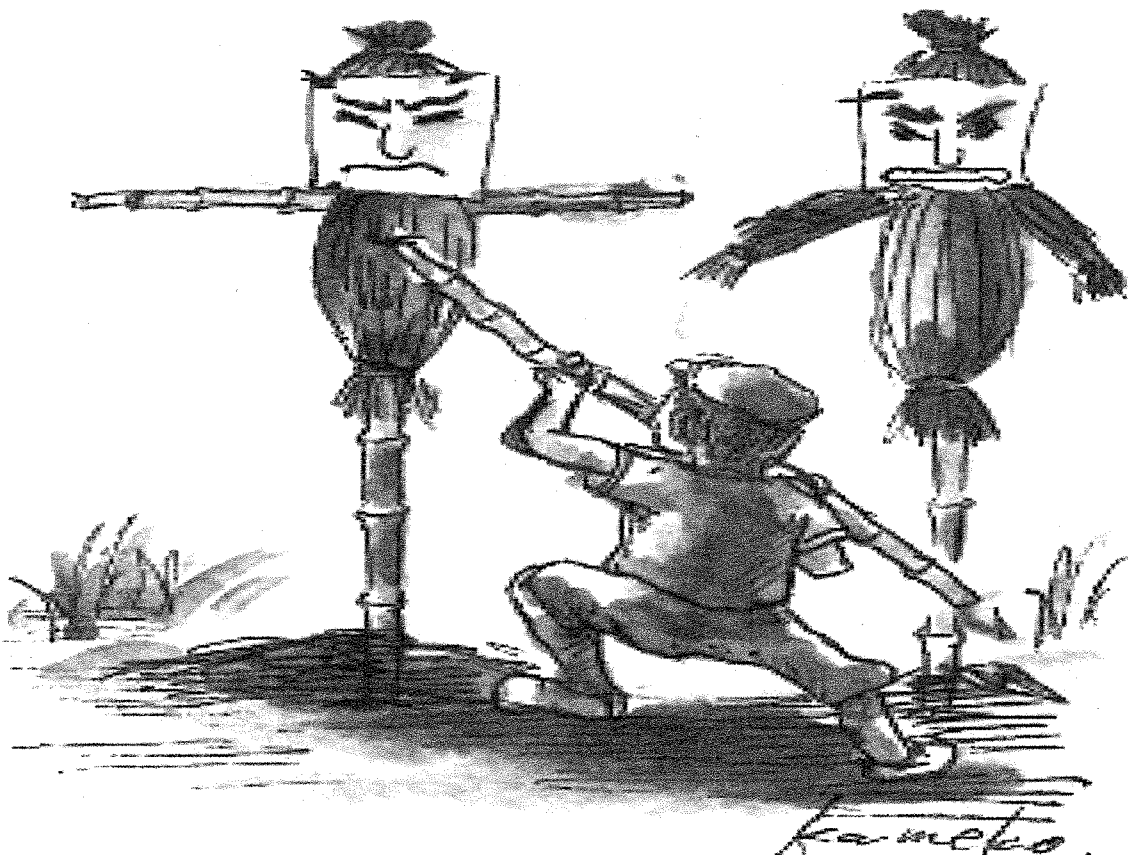
例：校舎の中で先輩にすれ違うときは、よけて先輩を通す。

歩いている時、先生、先輩（年上）の前は横切らない。後ろを横切る。

自分から先に大きな声で相手の顔を見て挨拶する。

- ② ダラダラした態度はしない。呼ばれたら、大きい声で返事をする。

例えば、返事の小さいものは、軍事教官（学校にサーベルという長剣を吊るした陸軍^{ちゅうい}中尉がいた）に^{なぐ}殴られた。



軍事教練^{きょうれん}（先をとがらした竹ヤリで、当時のアメリカのルーズベルト大統領^{だいてうりょう}やイギリスのチャーチル首相のわら人形を突いたり、木製の鉄砲^{てっぽう}を担ぐ^{かつ}訓練）のさい、整列に遅れたり、ダラダラしていると、軍事教官がリーダーを前に呼び出し、先ず教官がリーダーの顔を二、三回なぐり、その後二列縦隊^{じゅうたい}に並ばせ、双方^{そうほう}が向き合うと、リーダーの号令とともに相手（同級生）の顔を引っぱたくこともあった。

背筋がピーンと伸びていたような学生生活でした。

卒業後は、就職^{しゅうしょく}するもの、農業を継ぐものとバラバラになりましたが、おたがいの絆は今でもしっかりつながっていると思っています。高校を卒業して65年、毎年、ふるさと松江、広島、近畿^{きんき}のローテーションで同窓会^{どうそうかい}を開き、おたがいに健康を確かめ合い、むかし話に花を咲かせていましたが、中学1年から70年の節目^{ふしめ}と高齢化^{こうれいか}、そして参加者^{さんかしゃ}がへり、2015年5月24日をもって、ついに同窓会は打ち止めとなりました。

同窓生諸君！！ 長い間ありがとう。またの再会を約してカンパイ・・・

2. 終わりに

戦中・戦後の体験を通して、私が一番強く感じたことをまとめます。

戦争が始まったら国も滅ぶが、家族や財産^{ざいさん}、そして友だちまで失うことになります。戦争になったら、君たちが先ず召集^{しょうしゅう}（戦争に強制的に参加^{きやうせいてき}）されると思ってください。

命を奪い合うのが戦争です。『戦争はノー』と言える勇気を持ちましょう。

また、日本はなぜ戦争に向かったか、ふたたび戦争をしないために、過去の戦争（日露戦争^{にちろ}から太平洋戦争までの歴史^{れきし}）への理解^{りかい}も必要です。

ですから、戦争が起こらないようにしっかり前を見据えて^{みす}、平和のために自分は何ができるか考えながら、生活して行ってほしいと思います。

最後に、生きて行くために忘れてほしくないものがあります。それは、『世の中は自分中心では生きていけない。』ということです。自分は、家族や友達など周囲の人に支えられて生きていることを、自覚してください。そして自分を支えて下さる方々に、感謝しながら生きていかれるよう、願っております。

(完)

文 岡本 榮一 広島市安佐南区山本五丁目16番21号 Tel 082-871-0006

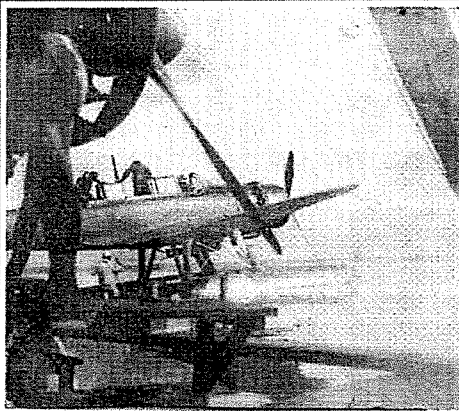
戦場になつた山陰

「建物の残骸(ざんがい)が飛散し、庭には十数人の遺体があった。損傷がひどく、あの悲惨な光景は今でも忘れられない」と語るのは、玉湯町(現松江市玉湯町)にあった海軍航空隊基地で水上偵察機の搭乗員をしていた青森県つがる市木造

湯町基地空襲

食事中の隊員たち直撃

町の医師野呂和博さんを襲った。隊員たちが(83)。米軍機の攻撃を食事をしていた講堂に知った同僚に防空壕 ロケット弾が撃ち込まれ、(85)へ引っ張り込まれ、二十五人が死亡、まれ難を免れた。三十人が負傷した。空襲は基地本部が道 同基地については、地は玉湯川河口東岸に三機を持ち、日本海のかれた旧旅館八勝園 島根県立松江南高校のあり、海軍航空隊の湯 輸送ルートを確認する



45年8月17日、最後の出撃をする湯町基地の水上偵察機。戦争終結後も「戦闘行為停止」の命令が届くこの日まで哨戒飛行が続けられた



湯町基地で戦死した25人の慰霊塔と角光治住職。松江市玉湯町湯町の報恩寺

町派遺隊が一九四五(昭和二十)年五月に開隊。百二十人余りが駐在した。水上偵察機として。そのため、対潜哨戒を任務とした。同基地から二、三の西の六道湖岸には、水上偵察機の「玉湯基地」建設が進められ、終戦前日の八月十四日に完成した。同町内のあちこちに爆弾が格納されていたことも明らかになっている。戦後間もなく、同町内の報恩寺に戦死者の供養塔が建てられ、今でも、遊族や旧海軍関係者が慰霊に訪れる。



列車が空襲。当時

一九四五年七月二十八日には安来市の山陰線島田トンネルなども米軍機の攻撃を受けた。

「鳥取県の戦災記録」(鳥取県の戦災を記録する会発行)などによると、島田トンネルでは上り列車が米軍機の攻撃を避けるため避難していたが、トンネルから出ている機関車が銃撃を受け、一人が負傷した。島根県松江市の海軍航空隊大社基地でも機銃掃射を受け、隊員一人が負傷した。

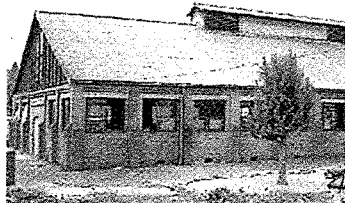
その他の戦災地

鳥取県内では、境港市小瀬津町と米子市大隈津にまたがる海軍航空隊美保基地で勤労動員のため来ていた生徒一人が機銃掃射で死亡。境港市渡町、米子市富盛町でも合わせて住民四人が自宅で犠牲になった。

三日前の二十五日には米子市の境線大隈津一与ヶ浜駅間で上り貨物列車が攻撃され、乗っていた三人が重軽傷を負った。

三十日は鳥取県岩美町の山陰線岩美駅構内で停車していた列車などが銃撃を受け、機関士と五人が死傷した。

島根の戦争遺跡



現在は浜田一中の屋内運動場として使われている浜田連隊の練兵場。浜田市黒川町

学校施設

大社基地 島根県松江市神水にあり、旧新川の川床だったことから新川基地と呼ばれた。終戦までの三月間だけ使われ、海軍航空隊の軽爆撃機「銀河」が配年、浜田高の練兵場(一九一六(大正五年)年に建設された。練兵場は赤レンガと切り妻造りが特徴の近代建築。平屋建てで、面積はとも約六百四十平方メートル。連隊跡地に建つ浜田第一中学校と浜田高校の敷地内にあり、今も生徒が屋内運動場として利用している。

※掲載の著作権については、株式会社山陰中央新報社様の承諾をいただきました。 筆者より

戦中・戦後体験 資料

(岡本 榮一)

1、子どもの頃の戦争と時系列

年	事項	内容
	その頃の日本	<p>第一次世界大戦後、日本は好景気でしたが、1923年の関東大震災、1927年の金融恐慌(きんゆうきょう)、1930年の昭和恐慌(きょうこう)と大変不景気になってきました。</p> <p>そのような中、日本の軍部の中には状況を変えようと、大陸進出を考える人も出てきました。</p>
1931年9月～ 1932年3月	満州事変	<p>日露(にちろ)戦争で、日本は満州鉄道の利権を得ました。満州に駐在していた日本の関東軍は、中国軍のしわざと見せかけて鉄道を爆破(ばくは)し、軍事行動にでました。そして満州主要地を、ことごとく占領(せんりょう)していきます。この一連の軍事行動を「満州事変」と言います。</p> <p>* 満州は中国東北部に位置し、当時の首都は新京。現長春</p>
1937年7月～ 1945年	日中戦争	<p>北京郊外の盧溝橋・湖(ろこうきょう・こ)付近で、中国軍からの発砲(はつぽう)があり始まった、中国との戦争。現代史では、日本軍の爆破により戦争が始まったとされています。</p>
1939年～	第二次世界大戦	<p>ドイツがポーランドに侵攻(しんこう)して始まった戦争。日本は中国との戦争が長引き、経済的に大きな負担(ふたん)となっていました。</p> <p>しかし、中国はアメリカの援助(えんじょ)を得て、戦争終結(しゅうけつ)のメドが立たなくなり長引いていきました。日本は長期化する日中戦争の打開策として、ドイツ、イタリアと 同盟(どうめい)を結びました。</p> <p>アメリカからの経済制裁(せいさい)もはげしくなり、中国との戦争をやめて、撤退(てつたい)するか、アメリカと戦争を始めるかを迫られます。</p>
1941年12月 ～1945年8月	太平洋戦争	<p>ドイツと同盟(どうめい)を結んだ日本は、ハワイの真珠湾を攻撃。太平洋戦争に突入しました。</p> <p>広島、長崎に原爆が投下され、終戦となりました。</p>

2、ことばの説明

軍需産業 (ぐんじゅさんぎょう)	軍隊で必要なものを作ったり、販売したりして利益を得る企業(兵器、戦車などから、毛布、燃料、食料などすべて)
学徒動員 (がくとどういん)	第二次世界大戦末期の1943年以降(いこう)に、深刻(しんこく)な労働不足をおぎなうため、中学校以上の生徒や学生が、軍需(ぐんじゅ)産業や、食料生産にかりだされること。44年から学校に籍(せき)を置いたまま学業は停止されました。
脚気 (かっけ)	ビタミンB1の不足によって起こる病気で、体のだるさ、手足のしびれ、むくみから始まり、末梢神経(まつしょうしんけい)のマヒや心臓衰弱(すいじゃく)を起こす病気。
グラマン戦闘機 (グラマンせんとうき)	当時、世界で一番早く、小回りが効く米軍機。
予科練 (よかれん)	海軍飛行予科練習生(少年航空兵)のこと。14歳以上20歳未満の若者を対象にした、飛行搭乗員(とうじょういん)養成制度。戦争拡大と共に三重・奈良・松山・鹿児島などで訓練をしました。

プロフィール

岡本 榮一

1932年6月7日 島根県松江市生まれ

1987年 NTT倉敷支店退職

2015年6月 NPO法人里山環境保全みどり会事務局長

在広島県人会常任理事総務委員長

広島ふるさと松江会顧問

広島市安佐南区山本五丁目16-21在住

e-mail a113.o13@rondo.ocn.ne.jp

印刷・発行日 2015年10月 (非売品)

川本 智子

イラストレーター、手書きシャツ作家

1980年 大分県生まれ

広島市安佐南区山本一丁目19-29在住